

## 身近な危険生物 ～スズメバチ～

株式会社 建設技術研究所 野中俊文

キーワード：危険生物，都市部，スズメバチ，

### 1. はじめに

野外には、色々な動植物が生息、生育している。その中には、人の健康を脅かす危険な動植物も多い。特に近年は、人々が、動物の本来の生息域にまで活動の範囲を広げていることから、多くの動植物に触れるようになり、その結果、さまざまな被害を受けるようになった。山や川など動植物が通常多く見られるところでは、ツキノワグマやマムシ、トリカブトなどの危険生物が多いのが普通である。そこに立ち入る際には、事故にあわないよう、危険をよく知り、対処法を実践する。

しかし、近年は、人々の生活の中心である都市部でも多くの危険生物が見られるようになった。都会では、人という生物が最も恐ろしいが、それ以外にも、ペットの犬猫、爬虫類、街路樹につくドクガの仲間、毒をもつ園芸植物など多くの危険動植物が見られる。その中で毎年、死亡事故も記録されているのが、スズメバチ類である。

本講演では、都会において人意外に最も危険と思われるスズメバチ類（以下、種名以外はスズメバチとする）について紹介するとともに、その対処方法などについて紹介する。

### 2. スズメバチ

#### 2.1 都会におけるスズメバチの状況

毎年、夏の初めにはカブトムシやクワガタ、チョウなどを対象とした生物の番組が放送される。夏が終わりに近づくと、それらの番組は「危険生物」、「スズメバチハンター」などに取って代わり、ニュース番組のスポットや、特集などでたくさん放送されている。裏を返せばそれだけスズメバチが多いということである。

もある。また、スズメバチだけでなく、ハチの仲間は都会に意外と多い。



写真 スズメバチハンターの特集

#### 2.1 スズメバチとは

スズメバチは、たくさんの種類がいる昆虫類の中で、ハチ目に分類される。ハチ目には、ハチやアリなどが含まれ、一般的な特徴としては、「針を持ち人を刺す」、「社会性を持つ昆虫」などが有名である。日本分類学会連合（2003）第1回日本産生物種数調査によれば、ハチ目の既知種数は、4,516種である。



写真 オオスズメバチ

その中の一部にスズメバチ科がある。日本では、スズメバチ科は「スズメバチ属」、「クロスズメバチ属」、「ホオナガスズメバチ属」

の3属で構成され、それぞれの属は8種、5種、4が記録されている。これらの17種は刺されるととても痛いグループである。スズメバチ属の8の中には、近年、対馬に侵入し、特定外来生物となった「ツマアカスズメバチ」も入れている。

## 2.2 ツマアカスズメバチ

ツマアカスズメバチは、自然状態では、パキスタンから中国南部、台湾にまで分布し14種が記録されている。



写真 ツマアカスズメバチ

すでに海外では、2005年にフランスでも記録されており、その進入は、2004年以前に、中国から輸入される陶器に紛れてボルドーの町に侵入したと考えられている。それ以降、ヨーロッパで急激に分布を拡大し、2010年までにフランス南部から西部とスペイン北部までの広い地域に広がり、2012年までにポルトガル、ベルギー、ドイツにまで達している。アジアでは、2000年代初頭（記録2003年）に韓国へも侵入し、現在では韓国南東部で広く観察されている。

日本では、2012で初確認され現在は島内の広い範囲で確認されている。2013年には北九州でも見つかった。

本種は、攻撃性が高く、海外では死人も多く出ていること、都市部でも高層マンションなどに営巣が確認されていること、生態系の上位に属する広食性の捕食性昆虫であるため、生態系への影響が大きい生物であると考えられ、人への直接的な加害や養蜂への被害、そ

して、生態系への悪影響を考慮すれば侵入と定着はなんとしても阻止する必要がある、2015年3月「特定外来生物」に指定された。現在、福岡県を初め、九州各地では、HPやリーフレットなどで注意を呼びかけている。

## 2.3 スズメバチの特徴

スズメバチに刺された、襲われたなど危険な目にあつた方はどれくらいいるのだろうか。実際にテレビをはじめとしたメディアでは、多くの情報が流れているため、知識として知っている人は多いと思うが、その生きた姿を見ている人は多くないだろう。しかし、近年都会でのスズメバチの数は決して少なくないことから、その特徴を知っておく必要がある。

### 1) 針を持ち刺す

多くの人のイメージは、「スズメバチ＝刺す＝痛い」といったことが第一であると考えられる。このイメージは決して間違っていない。しかし、刺すのはすべてメスであることは意外と知られてない。針は産卵管やそれが変形したもので刺すことができるのはメスだけである。したがって、オスの個体はさすことができない。夏の終わりから秋になるとスズメバチやアシナガバチの仲間のオスがたくさん出現し、家の中に入ってくることもあるが、オスと判れば怖がることはない（といっても見た目で怖い・・・?）。



写真 オオスズメバチ (左:メス:右:オス)

### 2) 8~9月に活発となる

スズメバチの巣は、一年で空になる。交尾

した一匹の女王蜂が春に巣を作り始め、働き蜂の数が増えるに従い、巣を大きくしていく。特に8月～9月にかけては、条件が良いと多くの働き蜂が生まれ、秋までに巣はどんどん大きくなる。多くの人がスズメバチを目にするのもこの時期で、事故の報告も多く、結果テレビでも取り上げられることになる。

### 3) 主な餌は昆虫類

スズメバチの採餌の様子を見たことは、スズメバチを見たことがある人よりさらに少ないと思われる。スズメバチは餌を求めて飛び回っているわけだが、そこには餌が存在する主な餌は、昆虫類で、ミツバチの巣箱は絶好の餌場である。そのほか、樹液や果物なども餌とする。特に果実栽培の現場では、熟した果実を加害することが多く、被害も少なくない。



写真 ミツバチの巣箱を襲うオオスズメバチ



写真 食用ホオズキを加害するキイロスズメバチ

### 4) 営巣場所は様々

スズメバチの巣は、いろいろなところに作られる。オオスズメバチやクロスズメバチの

仲間には、主に土中、キイロスズメバチやコガタスズメバチ、ツマアカスズメバチは樹幹や樹洞、それに似た民家の納屋などが多い。特に近年は、住宅の軒下や天井裏などの営巣例も増えていることから注意が必要である。

### 5) スズメバチの事故

毎年、多くのスズメバチによる事故が報告されている。事故の程度は様々であるが、スズメバチで命を落とす方も少なくない。

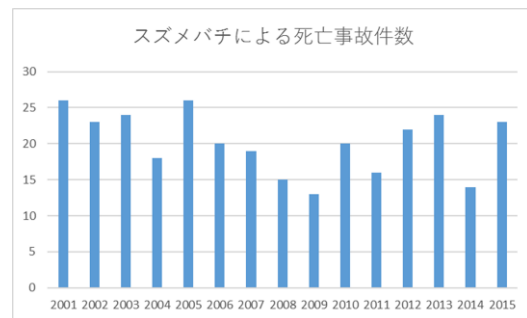


写真 スズメバチによる死亡事故数の推移

### 5) スズメバチ対策

スズメバチでもっとも怖いのは、先に示した死亡事故につながる「アナフィラキシーショック」である。これはアレルギーの一種で、蜂毒アレルギーを持つ人は、刺されると、全身の震えや嘔吐、血圧、意識の低下などが見られ、死に直結する。これらの症状が見られた場合には、すぐに病院に行かなければならない。アレルギー検査は、病院で行うことができ、アレルギーがある場合には、ショックを抑える「エピペン」が処方される。

ただし、衣類や香水など、スズメバチが寄らないような対策も自身で可能である。

### 2.4 巣の駆除

夏の終わりから、秋にかけ、いわゆる「スズメバチハンター」は休みなくスズメバチやアシナガバチなど都会の蜂の駆除に奔走する。あるハンターの日記によれば8月～11月にかけての出動回数は100日を越える。つまりそれだけ都市近郊にはスズメバチが多い。特に近年、里山を切り開いた住宅地に残された樹林内でのオオスズメバチの営巣や住宅の軒下

のキイロスズメバチの営巣駆除依頼が多い。



写真 ホテルに隣接する場所でのスズメバチの駆除

巣の大きさにもよるが、秋のオオスズメバチの巣の駆除では、ひとつの巣に 200～500 の新女王蜂がみられる。



写真 巣のあとに残ったオオスズメバチ新女王



写真 オオスズメバチを煙でいぶして取り除く

巣には、新女王だけでなく、オス蜂、働き蜂など多くの蜂が見られる。駆除した巣板の穴の数を数えると、その数は全部で 4,000～

6,000 個体が産まれたことになる。

巣を駆除する際には、薬をかけて殺した後には駆除する場合と、煙幕により蜂を排除し、巣を生け捕りにする場合がある。巣を生け捕りする理由は、研究者への材料提供や、人々の栄養補給のためである。

実際に駆除したオオスズメバチの巣から、蜂の子、蛹等を取り出し、食べてみるとなんともおいしく、栄養価が高い味がする。特に自家製の佃煮は栄養たっぷりといった感じである（注：感想は個人により異なります。）。



写真 スズメバチの利用（右：佃煮）

### 3. おわりに

都会におけるスズメバチの被害は、近年右上がりである。さらに新たな外来種のスズメバチや従来の生態と異なり都会に適応したと考えられるスズメバチについても報告されている。都会における危険のひとつとして、事故にあわないためにもスズメバチをよく知り、対処することが重要である。

最後に、ツマアカスズメバチの標本を提供いただいた上野高敏九州大学准教授、また、草間岳彦（春日部市）、田迎正人（春日部市）には、多大なる協力をいただいた。この場を借りてお礼申し上げる。

### 4. 参考資料

日本分類学会連合(2003) 第1回日本産生物種数調査 (<http://ujssb.org/biospnum/search.php>)

上野高敏准教授（九州大学大学院農学研究院 生物的防除研究施設）

<http://www.agr.kyushu-u.ac.jp/lab/ine/ue-no/tsumaakal.html>